

徳山高専が世界大会で快挙

課題都市「周南市」で世界が競う

＝フォーラムエイト＝

フォーラムエイト（東京都港区、伊藤裕一社長）が主催する「第19回デザインフェスティバル」で、

「第15回学生BIM&VRバーチャルデザインワールドカップ（VDWC）」の最終公開審査と表彰式が開催された。審査と表彰式は11月20日、同フェスティバルのメイン会場である品川インターシティホール（東京都）で行われ、徳山工業高等専門学校（山口県周南市、阿部恵校長）の学生チームが、世界を相手に「審査員特別賞」を受賞する快挙を成し遂げた。

建設・土木業界におけるDX（デジタルトランスフォーメーション）が加速する中、次世代の空間デザインを競う国際コンペティション。毎年世

界の主要都市を課題対象地に、国内外の大学・大学院生らが高度な技術と表現力を競うハイレベルな戦いが繰り広げられる。

15回目の節目を迎えた課題は「山口県周南市」。世界各国から65チームがエントリー。同校からは4チームが挑み、2チームがファイナリストとして入賞。地元のコネクティスト（文脈）を深く理解した提案と技術力が高く評価され、世界の舞台でその存在感を示した。

同コンテストは、BIM／CIM（3次元モデル活用）およびVR（仮想現実）を駆使し、先進的な建築、橋梁、都市、ランドスケープのデザインを競う。学生たちは同社のソフトウェアを活用して計画・設計・シミュレーションを実施。総合

的なデザインをVRデータで表現し、技術力とアイデアを競い合った。

テーマは「山口県周南市」動物園に続く道「パーク・エンターテインメント・プロムナード」。徳山駅から徳山動物園へ続く「御幸通り」と「岐山通り」を中心とした約2kmが対象。戦災復興都市計画の典型として整備された幅の広い道路で、銀杏並木や中央分離帯を持つ美しい都市軸だが、21世紀を迎え、人口減少や高齢化が進む中、かつての「車中心」から高齢者や歩行者に優しい空間への転換が求められている。コンテストでは、自動運転モビリティや歩行者空間をどう再構築し、市民や観光客を楽しませる空間として再生させるかが問われた。

徳山高専からは2チームが予選を通過し、最終審査に臨んだ。

審査員特別賞（池田靖史審査員長選定）「Architectural Informatics Award」を受賞したのは、チーム「Airoha」の作品「patasky（パタスカイ）」。

未来から来たフレンドリーな動物型モビリティが人々を迎える世界観を

提示。「パタ」という足音を象徴する地上移動ロボットは、愛らしいデザインで機械への恐怖心を軽減し、太陽光と路面摩擦から動力を得るサステナブルな設計とした。空には山口県の特徴であるフグをモチーフにしたロボットが透明なチューブを滑空。高度差による重力利用や夜間の発光演出など、楽しさと持続可能性を両立させ、人・自然・技術を優しにつなぐ提案が、池田審査員長から高い評価を受けた。

また、チーム「NK」は作品「MEGURU」でノミネート賞を受賞。

地方都市の課題である人口減少や空き家問題を

逆手に取り、自由な街路設計の可能性に着目。岐山通りと御幸通りに一人乗りの自動運転AR（拡張現実）車両を導入し、高齢者を含むすべての人の移動の自由を実現する。空き地は憩いの空間とし、AR技術による「仮想住民」がスポットを紹介。来訪者が実際の住民と交流しながら物語を紡ぐ「物語性のある空間体験」を創出した。

世界一の「ワールドカップ賞」には、国立成功大学（台湾）チーム「OZ」の「The Roa

d」が選ばれた。

駅からの2kmを「持続可能で包括的な公共空間」として再定義。動物に配慮したデザインを街中に展開する「Zoo on the Street」。

「車線削減により緑豊かな高年齢者に優しい空間を作る」「Linear Urban Leisure Space」、陸・空・高速網を横断する3次元モビリティ「Smart Tri-Modal Mobility」の3戦略を提示。これらを組み合わせ、周南市の遊歩道を地域活性化の新たなモデルとして確立する包括的な提案が最高評価を得た。

次ぐ優秀賞は、国立豊田工業高等専門学校（日本）チーム「Echoist」の「Trace of Homid」が受賞した。

徳山の港湾の歴史と地形を活かし、海から緑へシームレスにつながる遊歩道を構想。防災対策と観光体験のバランスを図りつつ、港湾交通と連携した人工的な潮力発電により、植生を育む電力を賄うという、エンジニアリングとランドスケープを融合させた提案となった。

7月にイタリア・ローマで行われた予選選考会には国内外から多数の応募があり、AI活用やシミュレーションを駆使した31チームが通過。最終審査では、課題都市・周南市のコンテキストにいかん焦点を当てたかが重要視された。

今回のコンテストは、周南市のメインストリートが秘めるポテンシャルを世界的な視座で再評価させる契機となった。地元学生が最新技術を駆使して描いた未来図は、建設産業におけるDXが単なる業務効率化の手段ではないことを雄弁に物語る。彼らが示したように、DXとは地域の魅力を再発見し、新たな価値を創造するための「クリエイティブな武器」にもなる。今回の受賞を大きな糧とし、彼らが将来、現実の周南市のまちづくりを担うエンジニアとして飛躍することに期待したい。

なお、入賞作品の映像等は<https://vdcwcforum8.co.jp/2025/>で閲覧できる。



池田審査員長とチームAiroha（提供：フォーラムエイト）



審査員特別賞に輝いた「patasky」



QRコード
入賞作品一覧